

千代川における八東川合流点付近の治水・利水の歴史

鳥取大学工学部 正員 道上 正規
鳥 取 県 正員 ○城上 真

1. はじめに 鳥取県最大の河川である千代川の八東川合流点付近は河道がよく変化しており、治水において最も重要な地点である。また、この八東川合流点付近には大井手、大口という二大用水があり、利水においても最も重要な地点の一つである。本研究では、千代川における八東川合流点付近の河道の安定化と堤防構築との関係及び、主要な用水路と神社との関係に関して、過去の文献等をもとに歴史的に検討した。

2. 千代川の旧堤概要 千代川には兩岸にいくつもの旧堤がある。これらは、左岸は亀井藩が、右岸は池田藩が互いに競い合い、江戸時代の初期に築堤したものである。

池田藩は沖積平野に居城をもち、その湿潤地帯にある城下町は真正面から洪水の直撃を受けるような地理的悪条件にあるので、城もろともに治水と軍事的防御を兼ねた都市計画が必要であった。それに対し、鹿野を居城とする亀井藩は居城地の治水には何等心配することはなかったが、千代川左岸に点在する自然堤防上の村落に対する洪水防御や農地の拡大を意図して堤防を築き、意識的対岸に洪水流を向けたようである。この様に藩の政策と領地、環境を異にする両藩はことごとく対立し、洪水のたびごとに流路が変転する千代川にからんで、治水、領土争いの絶え間はなかった。¹⁾

3. 胡摩堤の築堤(図-1) 八東川合流点の少し下流から砂見川河口まで千代川左岸約2.5 kmにまたがる胡摩堤は、従来この一帯を洪水から護るために、鹿野城主亀井茲矩(かめいこれのり)(1557~1612年)によって築造されたと考えられて来た。この八東川合流点の千代川左岸で堤防が全くなかった場合、一番千代川から洪水が入り易いのは、河原と袋河原の自然堤防の間の河原村字五反田の部分である。よって、まず最初にこの部分に堤防が造られたのであろう。これが河原堤である。次に千代川から洪水が入り易いのは、八東川合流点の千代川沿で一番相対高度の低い桶常村字胡摩河原付近である。この部分から洪水が入ると、相対高度の低い方へ水が流れるため、布袋の村に洪水が押し寄せてしまう。布袋の村がこの場所へ移転して来たのは、文禄二年(1593年)八月の高麗水の時といわれているので、この頃に胡摩河原の付近に胡摩堤が出来たと思われる。また、亀井茲矩は大井手用水を造るため、慶長七年(1602年)、当時鳥取城主であった池田長吉(いけだながよし)(1570~1614年)に高草郡加路村(現在の鳥取市賀露)の半分を与えるかわりに、八上郡袋河原(現在の河原町袋河原)付近を得ている。この加路という所は漁港、商港といわれる以前から海岸集落の拠点として発祥しており、豊臣秀吉が鳥取城を攻めた際、豊臣の水軍によって守られた¹⁾ということであるので、この交換があった時には既に港として発展していた。もし、従来のように胡摩堤は亀井によって造られたとすれば、袋河原の土地は交換した時には安定しておらず、その後安定させ開発しなければならない。この様に不利な交換を本当にすんなり行ったのだろうか。む

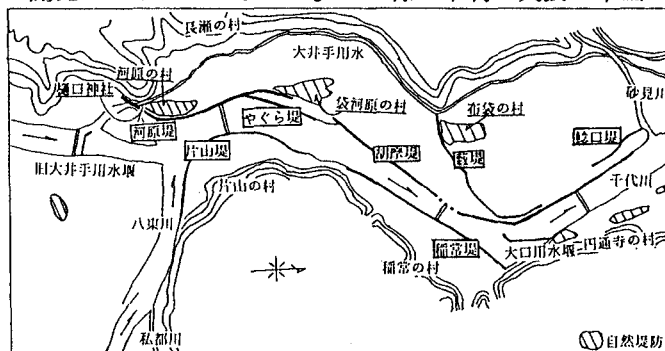


図-1 八東川合流点付近の旧堤

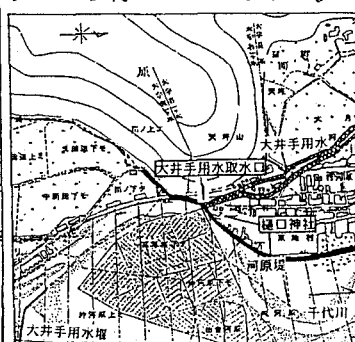


図-2 大井手用水取水口と樋口神社

しろ、胡摩堤は交換の時には既にあり、袋河原の土地は開発されており、加路と釣り合ったものであったので、この交換が成立したのであろう。また、胡摩堤と大口用水を関連させて考えると、大口用水を造れば、当然水量増加のために河道安定をはかるはずである。つまり、大口用水を造った人が、千代川左岸の土地安定と大口用水の水量増加という一石二鳥の考えにより胡摩堤を造ったと考えられる。では誰が造ったかという点、池田長吉は鳥取城主になったのが慶長五年（1600年）で袋河原の土地を譲るまで2年間しかなく、この様な大工事をする暇はない。それ以前はというと、豊臣秀吉が鳥取城を攻略したのが天正九年（1581年）であり、それ以前は戦国時代でその様な大土木事業をするのは殆ど不可能である。つまり、秀吉が鳥取城を攻略した1581年から池田長吉が鳥取城主となる1600年まで鳥取城主であった宮部氏、しかも1581年から1594年まで城主で、1599年に死んだ宮部継潤（みやべけいじゅん）（生年不詳～1599年）によって、胡摩堤は造られたと考えられる。宮部継潤は銀山を掘っていたということより、財源は豊富であった。よって、この様な大土木工事も出来たのであろう。その後、宮部は関ヶ原の戦いで西軍に付き、戦いに負け、代わりに池田長吉が鳥取城主になっている。よって、池田長吉は自分が胡摩堤を造り袋河原の土地を安定させたのではないので、何の未練もなく亀井茲矩にこの土地を譲ったのであろう。

4. 堤防構築による河道の安定化 戦国時代も末期になると、全国の武将達は外敵よりも内政への関心を強め、城の整備や領土の開発に力を注ぐようになり、長い中世時代から荒廃しきっていた領地内の既存農地の整備や、新田開発に力を注ぐようになって来た。¹⁾

堤防により河道を安定させ、それまで河道であった土地を新田として開発し、旧河道を利用して用水を引いた。紀元前からナイル川のように洪水跡に農地を造ったりした程、河川により出来た土地は肥えていたに違いない。つまり、河道安定ということが石高アップにかなり役立っている。また、胡摩堤の所でも述べたが、用水の水量増加にも河道安定は切っても切れない条件の一つである。この様に堤防による河道は数多くの利点はあるものの、一度洪水になり破堤すると、その水は旧河道を本物の河川であるかの様に流れる。堤防がない時の洪水より、破堤した時の洪水の方がエネルギーが溜まっていた分、被害は大きくなる。また、河川付近も田になっているので、それまでなかったそこへの被害も増える。千代川においても、1500年代以前と以降とでは、水害の回数が異常な程以降の方が多い。この頃の堤防は、年に頻繁にある小規模の洪水は防げて何年に一回あるという大洪水は防げなかったのであろう。

5. 大井手用水と樋口神社 千代川流域には、胡摩堤が出来たのとほぼ同時期に出来た大井手用水がある。大井手用水は1602年から1608年にかけて、当時鹿野城主であった亀井茲矩によって造られた。この大井手用水の旧取水口の所に樋口神社という市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を祭った神社がある。市杵島姫命とは弁財天のことで水の神である。

古来の口碑によると、大井手用水の五枚樋が洪水のため破損し、そのため、八上郡、高草郡の被害が大きかったので、明暦年間（1655～1658年）に高草郡の藪中に祭ってあった弁財天を転祭したところ、以来水害がなくなったと言われている。²⁾

この大井手用水の五枚樋が破損した洪水というのは、寛永十二年（1635年）八月の遷封水（おくにがえみず）のことではないかと思われる。その後、明暦年間までは寛永十六年（1639年）五月の洪水の一回しかなく、大被害があった割にはその後洪水が少なかったため、三十年近く神も祭らずほっておかれたのであろう。この樋口神社が明暦年間に祭られて以来、大井手用水の五枚樋の被害は資料には挙げられていない。

6. おわりに 本研究より、胡摩堤は千代川の河道を安定させ河道を農地として利用するとともに、大口用水の取水を容易ならしめるために造られたと考えられる。更に、樋口神社は大井手用水旧取水口の五枚樋を守るため造られたと考えられるということがわかった。よって、胡摩堤、樋口神社は近世の千代川流域の治水、利水を知る上で、最も重要なものの一つであるといえる。

参考文献 1) 建設省鳥取工事事務所：「千代川史」，昭和53年 2) 八頭郡町村会：「八頭郡史」，昭和57年